正信偈稽古和讃 全

特71
638

御文章

正信偈秘書古和讃

特71 634

右文堂梓

77H2028

明治十九年六月十八日寄贈

南無

命无量壽如來

无不可思議光

法藏菩薩因位時

在世自在王佛所

覩見諸佛淨土因
國土人天之善惡
建立无上殊勝願
超發希有大弘誓

五劫思惟之攝受
重誓名聲聞十方
普放无量无邊光
无尋无對光炎王

清淨歡喜智慧光
不斷難思无稱光
超日月光照塵刹
一切羣生蒙光照

本願名號正定業
至心信樂願爲因
成等覺證大涅槃
必至滅度願成就

如來所以興出世
唯說彌陀本願海
五濁惡時羣生海
應信如來如實言

能發一念喜愛心
不斷煩惱得涅槃
凡聖逆謗齊廻人
如衆水入海一味

攝取心光常照護
已能雖破无明闇
貪愛瞋僧之雲霧
常覆真實信心天

譬如日光覆雲霧
雲霧之下明无闇
獲信見敬大慶喜
卽横超截五惡趣

一切善惡凡夫人
聞信如來弘誓願
佛言廣大勝解者
是人名分陀利華

彌陀佛本願念佛
邪見憍慢惡衆生
信樂受持甚以難
難中之難无過斯

印度西天之論家
中夏日域之高僧
顯大聖興世正意
明如來本誓應機

釋迦如來拶伽山
爲衆告命南天竺
龍樹大士出於世
悉能摧破有无見

宣說大乘无上法
證歡喜地生安樂
顯示難行陸路苦
信樂易行水道樂

憶念弥陀佛本願
自然即時入必定
唯能常稱如來號
應報大悲弘誓恩

天親菩薩造論說
歸命无碍光如來
依修多羅顯眞實
光闡横超大誓願

廣由本願力廻向
爲度羣生彰一心
歸入功德大寶海
必獲入大會衆數

得至蓮華藏世界
卽證眞如法性身
遊煩惱林現神通
入生死苗示應化

本師曇鸞梁天子
常向鸞虎菩薩禮
三藏流支授淨教
焚燒仙經歸樂邦

天親菩薩論註解
報土曰果願誓願
往還廻向由他力
正定之因唯信心

惑染凡夫信心發
證知生死即涅槃
必至无量光明土
諸有衆生皆普化

道綽決聖道難證
唯明淨土可通入
萬善自力貶勤修
圓滿德號勸專稱

三不三信誨慇懃
像末法滅同悲引
一生造惡値弘誓
至安養界證処果

善導獨明佛正意
矜哀定散与逆惡
光明名號顯因緣
開入本願大智海

行者正受金剛心
慶喜一念相應後
与韋提等獲三忍
即證法性之常樂

源信廣開一代教
偏歸安養勸一切
專雜執心判淺深
報化二土正辨立

極重惡人唯稱佛
我亦在彼攝取中
煩惱障眼雖不見
大悲无倦常照我

本師源空明佛教
憐愍善惡凡夫人
眞宗教證興片州
選擇本願弘惡世

還來生死輪轉家
決以疑情爲所止
速入寂靜无爲樂
必以信心能入

弘經大士宗師等
拯濟无邊極濁悪
道俗時衆共同心
唯可信斯高僧說

●南无阿弥陀仏
●南无阿弥陀仏
●南无阿弥陀仏
●南无阿弥陀仏
●南无阿弥陀仏

一弥陀成佛のこのかたへ
いまゝ十劫をへたまへり
法身の光輪きはもなく
世の盲冥ことごとくてらしたり

南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏

智慧の光明えらぶし
有量の諸相ことごとく
光曉かぶらぬものなし
上真實明に歸命せよ

南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏

南无阿弥陀仏三

南无阿弥陀仏三三

南无阿弥陀仏三三

南无阿引

解脫の光輪をなし

光觸かぶるものはみな

有无とくなるとのべたまふ

上平等覺より歸命せよ

南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏

光雲无导如虚空
一切の有导ふさゝ難し
光澤かぶらぬものぞなき
難思議を帰命せよ

上

南无阿弥陀仏

南无阿弥陀仏

南无阿弥陀仏

三重

南无阿弥陀仏

南无阿弥陀仏

南无阿弥陀仏

南无阿弥陀仏

南无阿弥陀仏

南无阿弥陀仏

清淨光明あまねしたまへり
遇斯光のゆゑに名号をも
一切の業繫ものそこなはず
畢竟依を願命せよ

南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏

佛光照曜最第一
光炎王佛とおつけたて
三塗の黒闇ひらくなり
中
大應供故歸命せよ

願以此功德
平等施一切
同發菩提心
往生安樂國

三道光明朗超絶せり
清淨光佛とまうす
ひとたび光照かぶるもの
中業垢とのぞこり解脫をう

慈光をかぶるもの
ひろまいるところに
法喜をうとぞのべたまふ
中大安慰地歸命せよ

无明の闇を破るゆへ
智慧光佛とつけたり
一切諸佛三乘衆
上ともに嘆譽したまへ

光明てらしたまへばなれば
不斷光佛とつけたり
聞光力のゆへなれば
上心不斷にて往生を

佛光測量すべきなし

難思光佛とぞなづけたり

諸佛へ往生讃じて

下弥陀の功徳を稱せるむ

神光の離相をとらざれば

无稱光佛とぞなづけたり

曰光成佛のひろ大なる

中諸佛の讃ずるところなり

光明月日勝過して
超日月光をかぶりて
釋迦嘆じてをつたを
上 光等等と歸命せよ

弥陀初會の聖衆へ
等數のおよびなきたを
下 淨土を祈りうんひとみる
廣大會に歸命せよ

安樂无量の大菩薩

生補處に入るなり

普賢の德に歸してこそ

中 穢國ふかもぶを化するれ

十方衆生のためにこそ

如來の法藏ありめてぞ

本願弘誓ふ歸せしむる

中 大心海に歸命せよ

觀音勢至も為とす

慈光世界を照曜し

有縁衆度しそなはらしむ

下

休息あることあらしめ

安樂淨土にいるひと

五濁惡世をかへりみて

釋迦牟尼佛のごとくして

下

利益衆生をきはめあり

神力自在おること
測量しべからざる
不思議の徳をあつめたり
上无上尊に帰命せよ

安樂聲聞菩薩衆
人天智慧かぎりなし
身相莊嚴みなおなじ
他方に順じて名をつらぬ

中

顔容端政たぐひなし
精微妙軀非人天
虚无之身无極體
上
平等力と歸命せよ

安樂國に往ぐふひと
正定聚にこそ住するを
邪定不定聚くふもよし
上
諸佛讃嘆したまへり

十方諸有の衆生へ
阿弥陀至徳の御名をきく
真實信心いろ〳〵なり
上 おろかふ所聞と慶喜なり

若不生者のちらひ
信樂まことにたいろ
一念慶喜をるひとへ
中 往生なり

安樂佛土の依正へ
法藏願力のおせるなり
天上天下にたぐひなし
中大心力我歸命せよ

安樂國土の莊嚴へ
釋迦无尋のみことにて
とくともつくしがたきなり
上无稱佛我歸命せよ

已今當の往生を

この土の衆生のまぶべ

十方佛土よりきたる

上无量无數不可計

阿弥陀佛の御名を

入歡喜讃仰せしむまた

功德の寶我具足して

下一念大利无上なり

たとひ大千世界の
みてらん火ともとびゐきて
佛の御名をきくひとん
上 ぶぐく不退のかちをうる

神力无極の阿弥陀へ
无量の諸佛のほめたまふ
東方恒沙の佛國より
中 无數の菩薩ゆきたまふ

五十六億七千萬
彌勒菩薩ハとーとん
まことの信心ゐるひとん
このたびさとりとるべし

念佛往生の願により
等正覺にいたるひと
とかへり彌勒ゐおもてなして
大般涅槃さとるべし

真實信心うるゆへに
そなへち定聚に入ぬるゆへに
補處の弥勒におなじ
无上覺をさとる也

像法のときの智人も
自力の諸教をしおきて
時機相應の法をもて
念佛門にぞいりたもふ

弥陀の尊號をとなへ

信樂まことにうるおとく

憶念の心たゆまずして

佛恩報ずるおもひあり

五濁惡世の有情の

選擇本願信ずべし

不可稱不可説不可思議の

功德ハ行者ノ身ニ充ツ

本師龍樹菩薩へ
智度十住毘婆娑等
ひたくまておろく西とはめ
そゝ矣て念佛せしめう

南天竺に比丘あらん
龍樹菩薩とぞなづくし
有无の邪見を破ぶと
世尊へ稱てとゝまつる

本師龍樹菩薩は
大乘无上の法とときて
觀喜地と證したまへ
もっぱらに念佛をすすめる

龍樹大士世にいでて
難行易行の道をしめして
流轉輪廻のことわりを
弘誓にのせたまへり

本師龍樹菩薩の
いましめをたすけきうんひと
本願心にうけしめて
性弥陀と稱ぜ

不退ぜくうをみやぶ
るんとおもうんひとえる
恭敬の心に執持して
弥陀の名號称ぜ

南无阿弥陀佛の廻向の
息德廣大不思議かて
往相廻向乃利益にへ
還相廻向ホ廻入ぞう

往相廻向の大慈ろう
還相廻向ハ大悲ろう
如来乃廻向おうりぞ
浄土の菩提へいをせん

弥陀観音大勢至

大願のふかき事ハ来しなぞ

生死ハうみたるうきたる

有情ハよろこのさまよ

弥陀大悲の誓願ハ

ふかく信せんひとをみな

称ともあてもへだてなく

南无阿弥陀佛ととなへ

他力は信心うるひと成
うやまひおそれふかうこゝ
ろをくだき親戚ぞく
教主世尊にかたのよ

如来大悲の恩徳は
身骨粉にしても報ずべし
師主知識乃恩徳も
骨をくだきても謝ずべ

改悔文

そろくの雑行雑修自力はけ捨てふかうとて一心に阿弥陀如来我等が今度の一大事の後生御たすけ候へとたのみ申して候

たのむ一念のとき往生一定御助け治定とぎんじて申すべし

の新名い御恩報謝とぞんじ候

よ後こびまゝ候ての御と

聴聞まゝ候を

御開山聖人御出世ゆへ御恩

次第相兼の善知識のなさるゝ
ぎ原御勧化御恩おうゝゝぞん
し候このゝゝさゝあとさるる
る御おきて一期ばかぎり
まゝのゝそうしたべく候

末代无智の在家止住の男女たらん
ともかゝゝゝとひとつにして阿弥陀
佛とゆたのまるせたまふに餘のこと
へあらじとふかく一心一向に佛たすけまを
まゝらん衆生たゞ罪業ハ深重なり
ともなるをすゝ弥陀如來ひとへに

べしとこそおもへ第十八の念佛往生の誓願
せんちりかくのごとく決定しぬれば今こそ
称てもさきなくてもいのちのあらんかぎりは
称名念佛をぬきのあるべきなり
それ八万の法藏をきはめたりとも後世を
ぢらざる人を愚者とすべし一文不知の
尼入道なりとても後世を願ぜん智者
をもとめてまうでべき當流のこころざしなり
ただひとすらに聖教をよみまうの義なり
たりとしるとも一念の信心をいたしたる
ぶ人いとまなき事をもとめしるべし

聖人の御ことばなれば一切七男女たゝん身へ
弥陀の本願と信ずべしとふかくたのむ
ところにのぶべきなり
ゆへいかんとなる女人ものうたてきるくの
雑行をすてて一念弥陀如来今度の
後生たすけたまへとふかくたのゝ申さん

人へ十人も百人もみなもゝ弥陀の報土
に往生をとげた事さらにうたがひあるべ
からざるものなりあるかゝくく
夫在家ハ尼女房たゝん身へもよのゆう
も形く一心一向ゝ阿弥陀佛とふかくたのゝ

まゐらせて後生をたすけたまへと申さん
人びとをみな御さきみあるべしとおもひ
とりてさいはひの心をもつくべきなり
それをもちて弥陀如来の御ちかひの他力
本願と申すなり凡夫の人々を後生の
たすけたまへとまうすべし

思ひたちて南无阿弥陀佛をと
なへまゐらするの形ありてのごとく
抑男子も女人も罪のあさからんともがら
諸佛の悲願をたのみまゐらせまゐ時分に
末代惡世の凡夫は諸佛の御ちかひに中

かなへざる時あり是ゑよりて阿弥陀如来
と申奉る人諸佛ゑまもられて十惡五逆の
罪人をもすくはんとゝ大願をおこし
まします阿弥陀佛と申す給へる名
佛をとなへたのまて一念御まゐ候へ申
さん衆生をもれなくすくはせ正覺なしと

ちかひまします弥陀なれば我等が極
樂に往生せんと願まうさゞるべきや此
ゆへに一心一向に阿弥陀如来たのみ給へ
とふかく心にうたがひなく信じて我身の
罪のふかき事をばうちすてて佛まゐり申
はゞ一念の信心さまたんとゝもがら

い十人ハ十人ゞゞ一百人を百人ゞゞみな
浄土ゑ往生をゞゞこと也事さゝにうゝひふ
こゝろ〳〵まことをもくおりひかくゝ
らん心のかたゝんとなん南无阿弥陀佛
〳〵と時をもいたゞく所をもきゝゝゞ
念佛申べゝをまゝるゝゝ佛恩報謝の

念佛と申ゝゝゝ
信心獲得をもゝゝ第十六の願をゝゝる
ゝゝこの願をゝゝゝゝゝゝ南无阿弥陀佛
のゝゝゝゝゝゝ

あるべしこれをもつて弥陀如来発願大
願一まへをもつてこれを大經に
へ今諸衆生功徳成就とのたまへり
元始以来はくりとつくる悪業煩悩とのこ
るとこころもなく願力不思議をもつて消
滅するゆえをもつゆへに正定聚不退の位
位をえるなり煩悩を断ぜ
ずして涅槃をうるとへるこのこころなり此義
へ當流一途の耶談なり他流の人な
對してかくのごとく沙汰あるべきなる耶なり
能〻ようようぐべきものなりなるべしとく

聖人一流の御勸化はおりもはら信心を
もて本とせしめ候そのゆへはもろもろの
雜行をなげすてて一心に弥陀に歸命せ
ばかならず不可思議の願力をもつて佛のうち
へ往生し治定せしめたまふそのゆへは
一念發起入正定之聚とも釋したまへり

稱名念佛は如來より往生をさだめたまひ
御恩報盡の念佛とこころえたまふべきなり
あなかしこ〳〵

抑當流の他力信心はいかなるやうに聽
聞して決定せしむる人これまたその信心の

通とうと心底ふかくとたく他宗他人を
對して沙汰さまざまに路次大道にも
くは在耶こそもひろく人をもくらうす
こしと讃嘆さてがたくいつたく守護地頭方
にむかておもく信心をえうといひて疎略
の儀あるいよく公事とまゝゝをべし又

諸神諸佛菩薩ならびにおろそかにすべ
からず南无阿弥陀佛の六字にこ
そ南无阿弥陀佛の六字にこそ
あるがゆへにこそ外に王法をもて
おもてとし内心に他力の信心をもてたくて
世間の仁義をもて本とすべしこれまた
ひ當流のおもむきところの掟のおもむき

ありとこころうべきものなりなんぬること

文明六年二月十七日書之

抑毎月両度の寄合の由来ふかのなためぞとおもふに他のこころあるべし

自身は往生極樂の信心獲得の

こころをもつゆくあり往古より

いまにいたるまでも毎月の寄合と

いふことはいかにもことあるとおもく

ども信心の沙汰をかろ

もてこれをこころふ近年はいかにも

寄合のときは酒飯茶菓と

だんりょうしてみなみな退散せらるべし
佛法は本意あらざるべからざる次第
あり いかにも不信心の面々は一段の不審
ともたてまつり信心は有无と沙汰せられ
ところ多分の所詮も退散せしむる
条 ことごとくかんぬきなり

思案とおぼしめしたることあり所詮
自今已後はとにかく不信心の面々は
たがひに信心は讃嘆あるべきこと肝
要なり
そもそも當流の安心はともかくも
あるべきものこそ身の罪障のあらん

とゝにはぐゝとゝ為ゝくの雑行のこゝろと
やゝて一心不阿弥陀如來に歸命して
今度の一大事は後生たすけさまを
ふゝくたのまん衆生をばとゝくゝたすけ
たまへとこゝろにこゝひあるべ
ゝゝかゝくはこゝろゝくる人へ

まゝとゝ百即　白生あるべきゝこのゝゝ人
にゝゝ毎月の寄合はいとゝ報恩
謝徳のたゝとこゝろゝゝはゝれゝ真實の
信心と具足せゝゝる行者ともあゝゝ
べたりのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

明應七年二月九五日　書之

毎月両度講衆中へ　八十四歳

夫人間の浮生なる相をよく観ずるに
おのおのそれらのいとこの世の始中終
皆ほろびのごとくなる一期なれば
万歳の人身なりといへども事とさだめず
一生そもそもやすしいまいくばくか
たとひ百年の形躰とたのめども我や
そも人やさきにかはらんものとも
あらんとそれさだめ人もまたのがれず
露よりもあだしらんとそれば

朝に紅顔ありて夕に白骨となる身なりとぞ若い常に風きたりぬべき
をまちふるのまつたちまちふどち
のちいたるべきたえぬまに紅顔ひる
にて變じて桃李のよそほひ
ねるべきに六親眷屬あつまりてなげき

かなしむとも更かへる甲斐あるべからず
さてしもあるべき事なれども野外
ふとり夜半にけりとおしへて
ねまたぐ白骨のあれこれとひとれば
中くとあらそひさまざまの人間のなりわい
事に老少不定のさきたちあれどこれの人も

とゝ〳〵後生の一大事は心をかけて阿弥陀佛とふくたのまゝ〳〵せて念佛
をうすべしとなり此事あるべきく

抑當國摂州東成郡生玉の庄内
大坂とゝ〳〵在所へ往古よりいつある

約束のいりはるをやさんなる明應第五の
秋下旬比ゆゑよりかゝりそめあゝこゝ乃
在所とゝみそめしよりそだてさせ給ふく
一寺の坊舎成建立せしめ當年へいやゝ
とせ三年此歳霜をつゝきてこゝを
すまるゝ往昔の宿縁あさうなる因縁

ゆくとおもくくんぐりぬそれかつくべこの
在所ふ居住さしむる根元なるがゆゑ一生
涯とおろやくすべ榮花榮耀ゆ
これくまくまく花鳥風月ものこころとよべ
おくれ無上菩提のなかへ信心決定の
行者も敏糸昌せしめ念佛ともまうしん

とるうるも出来せずもるゆゑ以ての
おもふ一念ばかりこそはこれぐうるうり
まくらるるも世間の人ちんも偏執の
やうもなりもいとに題目ゆんども
出来ゆんとにてみやふこれ往生
とひて執心のこころをやめて退出とぐに

ものをうけてしたがひて貴賤道俗と
をなじく金剛堅固の信心を決定せしめ
おどをもて弥陀如來の本願のあひのあひ
だ聖人の御本意をたがへざる
ものの欲をもつて愚老ごとき當年ハ
八十四歳をもて存命せしめ条不思議なり

まことに當流法義にをいてあひかはるべき歟
わしごと本望のうへにあるべからざる
ものの欲をもつて愚老當年ハ夏ごろより
遠例ぜしめていまに本復ごとく
なれ邪ばけつして當年寒中にいかなる
往生の本懐とくべき条一定とおもひ

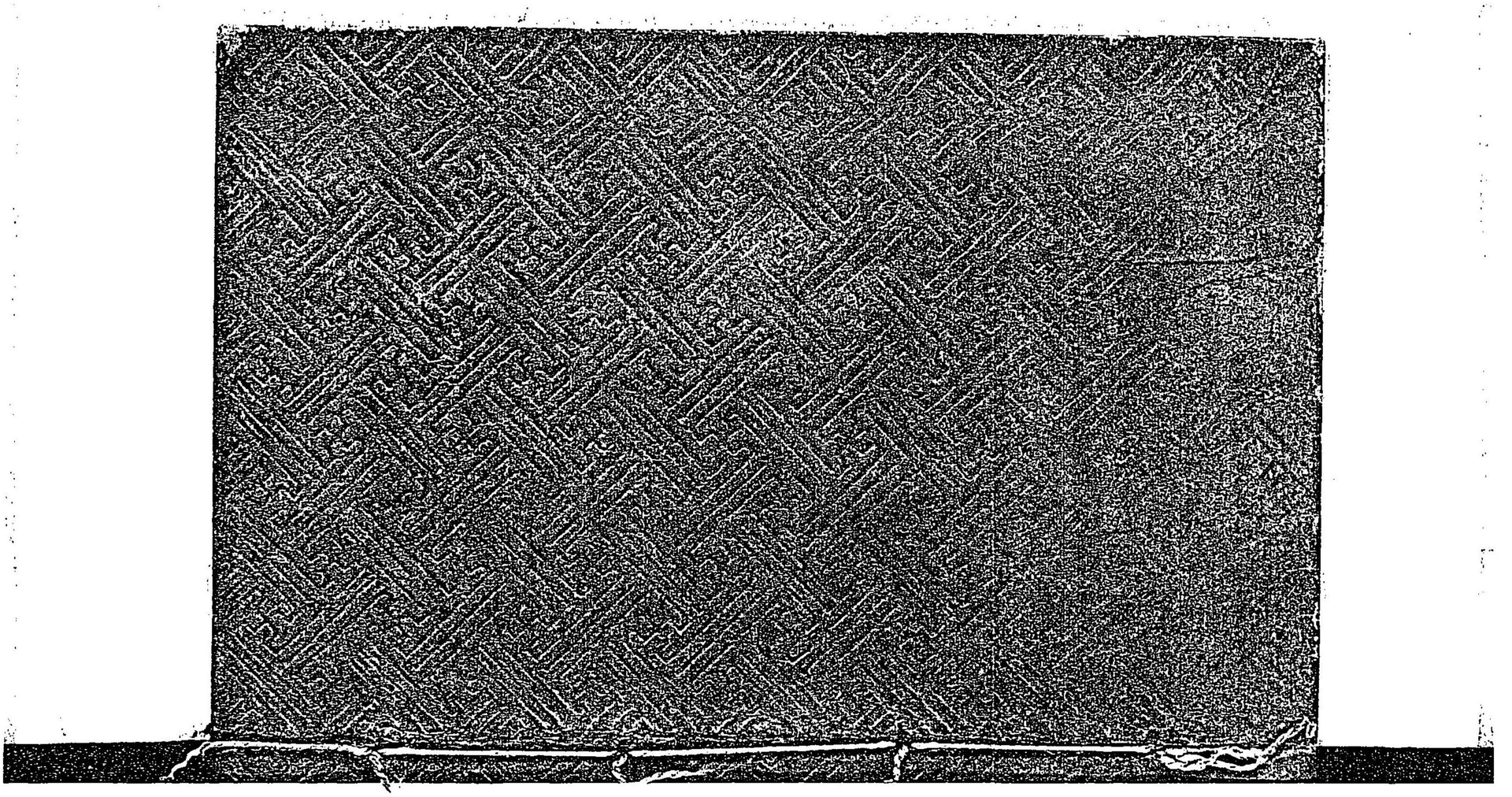
くんぐりあこもく存命のうちまでく
信心決定いまかしと朝夕あひまつ
まこゝに宿善まことにいとゞ述懐の
こゝろもつくもやむことなきこれ
在所に三年に居住とゝるこの甲斐も
おもへばいとかなしくこの一七ヶ日

報恩謝のこゝろにて信心決定あつて
我人一同に往生極楽は本意とぞ
たまはりたるものなりとぞ
明應七年十月九日ゟ此あて
こゝろ法よみ人にて信とぞ
ぞたるものなり

明治十九年四月廿四日反刻御届
仝　五月　出版　定價五錢

編輯兼原版人　石川縣平民　近八郎右衛門
金沢區横安江町百九番地

出版人　富山縣平民　守川吉兵衛
上新川郡富山大田口町百壹番地



正信偈稽古和讃

全

特71
638

300936-000-3

特71-638

正信偈稽古和讃（御文章）

近八郎右衛門／編

M19. 5

ABA-0035